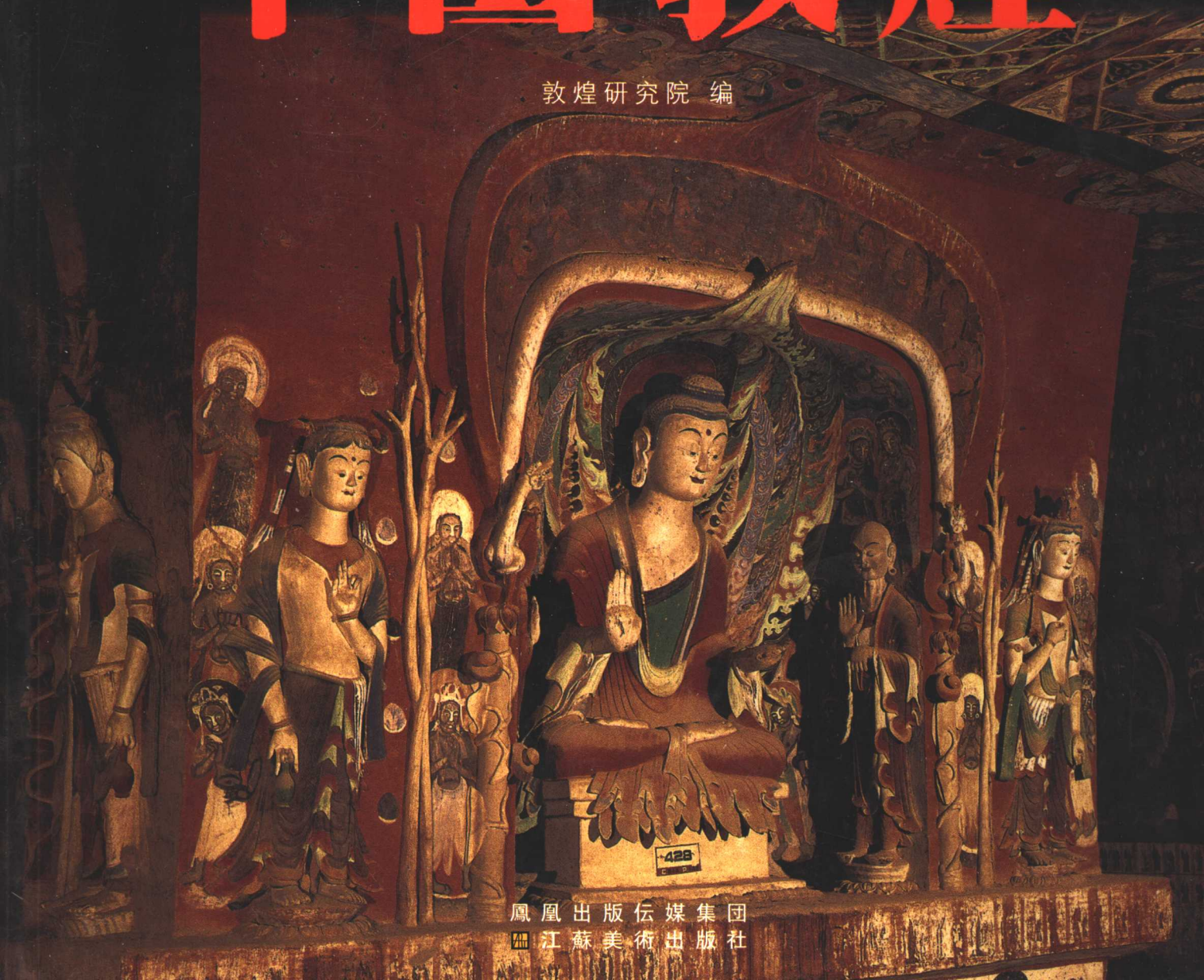




中国敦煌

敦煌研究院 编



鳳凰出版傳媒集團
江蘇美術出版社



中国敦煌



敦煌研究院 編

鳳凰出版傳媒集團
江蘇美術出版社



中国敦煌

中国敦煌

出版 / 発行所 凤凰出版传媒集团

江苏美术出版社(南京中央路165号 郵便番号:210009)

ホームページ 凤凰出版传媒网 <http://www.ppm.cn>

販売 / 江苏省新华发行集团有限公司

組版 / 深圳利丰雅高电分組版有限公司

印刷 / 扬州鑫华印刷有限公司

判型 / 889 × 1194mm 1/16

2006年4月 初版 2006年4月 第1刷

ISBN 7-5344-2083-0 / J · 1925

定価 190元













きらびやかに輝く敦煌石窟

樊錦詩

一、敦煌の歴史と地理

敦煌は中国甘粛省河西回廊最西端の一都市で、北には北山山脈(馬鬃山)、南には南山山脈(祁連山)が横たわっている。オアシス都市敦煌は南山から流れ出す氏置水(党河)の氾濫でできた沖積地帯で、まわりには広漠たるゴビ砂丘が広がる。敦煌の地は、東は中原と接し、西は新疆へと連なることから、漢代以来、中原から西域に通ずる「咽喉の地」とみなされ、有名なシルクロードの地理的重要都市であった。敦煌から東は、河西回廊を経て古都長安や洛陽に達する。西は、陽関を出て崑崙山脈北麓に沿い、鄯善(若羌 ルオチアン; 楼蘭遺跡のある県)、且末(チアルチャン)、于闐(和田; ホータン)、莎車(ヤルカンド)に至り、さらに葱嶺(パミール)を超えて往けば、大月氏、安息などの国々に達する。いわゆるシルクロードの南道である。また敦煌から玉門関を出て北に天山南麓に沿い、車師前王庭(トルファン)、焉耆(カラシャール)、亀茲(庫車; クチャ)を経て疏勒(カシュガル)に至り、さらに葱嶺を越え、大宛(フェルガナ)、康居(サマルカンド)、大夏(バクトリア)に出る道をシルクロードの北路とした。敦煌は陽関、玉門関を抑え、東或いは西からのキャラバンが必ずここを通るため東西

▼ 長城遺跡 西漢

紀元前121年、西漢王朝は酒泉郡を設立したのち長城を築き始めたが、その後20年間に甘粛の永登から更に西のロプノールまで建て続けられた。漢の時代には現地材料を入手して長城の修築に充てていたが、敦煌周辺の長城はほとんどがゴビの奥地で、ゴビの砂礫では城壁を築けなかったため、芦の草と砂礫を混ぜて、一層一層壁を搗き固めて築いた。草の層は厚さ約5センチメートル、砂礫層は厚さ約20センチメートルで、一層ずつ交互に重ねられているため、壁は堅く倒れにくく、この作り方が実際に即していることを裏づけている。この図版は玉門関付近に残る漢の長城の一部である。残壁は高さ2.5メートル、基礎部分は幅約3メートルである。壁は2000年の歳月を経過して、今でもゴビ砂漠に巍然と聳えている。風化したために、草の層と砂礫の層がはっきりと見えている。





交易の拠点となり、出発点、中継点として「華戎交わる所の大都市」と称されるに至った。ここでは、中原の絲綢（絹）や陶磁器、西域の珍宝、北方のラクダや馬や現地の食糧を、西域の商人と漢民族商人が交易する。と同時に漢代、つまり東西交通が開通して以降、中原の文化は引き続いて敦煌に伝わり、根を下ろした。一方、西域に接する敦煌は、インドを源とする仏教文化もいち早く摂取した。したがって敦煌においては、東西の文化が集まり、交流し、融合した。著名な敦煌学者の季羨林氏は「世界において、歴史が悠久で地域も広く、また自ら体系を形成し、しかも深く影響を与える文化体系は、中国、インド、キリシア、イスラムの四つのみで、五つ目はない。そして、この四つの文化体系が流れ込むところはひとつしかない。それは中国の敦煌と新疆である。これもまた二つとない。」と指摘するが、それは敦煌の地理的また歴史的

▼ 玉門関 西漢

玉門関は小方盤城とも呼ばれ、古代においては中原と西域各国が交渉の際の重要な関所のひとつであった。敦煌市街から西北へ102キロメートルのところに位置し、近くに漢の長城がある。西域ホータン辺りで産出した美しい玉がここを通過して中原へ運ばれたため、玉門関（玉関）と名付けられた。関所の城壁はほぼ完全に保存され、高さは約10メートル、南北は長さ26.4メートル、東西は幅24メートル、面積は630平方メートル以上である。西壁と北壁にはそれぞれ一つの門を設ける。外の北側には、東西に走る大車道があり、いわゆる古代のシルクロードである。





▲ 陽関 西漢

陽関は敦煌の町から西南へ76キロメートルの南湖郷の境内に位置し、玉門関から約80キロメートル離れている。中国では、山の南面と川の北辺は「陽」と呼ばれるが、陽関は竜頭山(今の墩墩山)の南に位置するので、陽関と名付けられた。現在すでに関城はなく、本図版の墩墩山に建てられた烽火台だけが残っている。烽火台は土で築かれており、残存の烽火台は高さ4.7メートル、基部は厚さ7.5~8メートル、頂部は厚さ6.6~8メートルである。烽火台の南には広く平坦な砂丘がある。発掘調査によれば砂丘の下には広い建築遺跡があり、専門家は関城あるいは軍隊の営所かもしれないと推測している。

な重要性について、十分に説明しているといえるだろう。

敦煌は2000年以上の歴史を有する。秦・漢時代以前は、月氏や烏孫などの民族がここに住んでいたが、前漢初年、北からの匈奴が月氏を追い払い敦煌を占領した。元狩2年(BC121)、河西回廊にいた匈奴が前漢に敗れ、それ以降、敦煌と河西回廊は前漢王朝の版図に組み入れられた。元鼎6年(BC111)、敦煌郡が設立され、酒泉、張掖、武威とともに河西四郡と称された。また敦煌の北方で長城を修築し、西方に陽関と玉門関を設立したのである。以来、敦煌は西域から河西回廊或いは中原地域に進入する門戸と軍事基地となった。戦略的な要衝である敦煌を強固にするため、前漢王朝は内地から移民させるとともに屯田兵を派遣し防衛させた。敦煌に対する前漢王朝の経営と開発によって、敦煌の歴史的な位置は確立した。その後、後漢王朝と曹魏政権の絶え間ない経営と開発により、敦煌は長期にわたって比較的安定し、シルクロードにおける重要な商品交易センターと食糧生産基地となった。ここにおいて、中原文化が根を下ろして発展し、儒家の經典が伝播してきた。インドを源とする仏教文化も敦煌に到達した。西晋時代、「敦煌菩薩」と称された經典翻訳の大師である竺法護とその弟子たちは、敦煌において經典を翻訳し布教を行っていたのである。

十六国時代、前涼、西涼、北涼の五つの政権が相前後して敦煌を支配した。この時期、中原は混乱し、しきりに戦争が起こっていたが、敦煌は比較的安定していたため人口は増え、中原或いは河西回廊の人々が続々と敦煌に避難してきた。中原からの漢・晋文化は敦煌と河西回廊において引き続き発展し得たのであった。この時期、敦煌出身の著名な儒学者が講筵を開き、著書を出し、中原からの伝統文化を大いに繁栄させた。それと同時に、敦煌を経由して西に求法、東に布教を行う僧侶たちの動向も敦煌の発展を促進した。『魏書・釈老志』は「敦煌は、地は西域に接し、道俗交えその旧式を得、村塢相属し、多く寺塔あり」と記している。そして、敦煌莫高窟がそうした機運を反映して誕生した。唐代聖暦元年(698)李克讓の「重修莫高窟仏龕碑」には「莫高窟は、それ前秦建元二年(366)、沙門樂傳あり、戒行清虚にして、執心恬静たり。嘗て林野を杖錫し、行きて此山に至り、忽ちとして金色を見る。その状千仏にして……窟一龕を造る。次に法良禪師あり、東より此に到りて、又傳師の窟の側に更に継けて(原文では即)營建す。伽藍の起りは、二僧に濫觴す」とある。その後、北魏宗室の東陽王元栄、北周貴族の于義が相前後して瓜州(敦煌)の刺史に任ぜられたが、彼らはいずれも熱心な仏教信者であったので、莫高窟の開鑿造像は大いに発展した。

隋代になると、西北の吐谷渾と突厥の侵入が撃退され、南北の分裂も統一されたため、シルクロードは滞りなく通じ、商業交易も栄えるようになった。文帝も煬帝も佛教を篤く信じて天下各州に舍利塔を建てるように命令を下ろしたので、この時の瓜州では崇教寺(莫高窟)に塔が建ち、宮廷写経も伝わってきた。隋王朝は短命であったにもかかわらず、敦煌での開窟の風潮を大いに興したのである。

唐王朝では、その前期、西域からの最大の脅威である西突厥の侵入を抑え、西域に安西都護府と安西四鎮が設置された。軍事的な防衛力を強化するため、敦煌と河西回廊に豆盧軍、墨離軍、玉門軍、赤水軍、建康軍などの十軍を設け、敦煌の経済的基礎を確立した。シルクロード全線は滞りなく通じ、「伊吾(ハミ)の西、波斯(ペルシア)の東、朝貢絶えなく、商旅相継ぐ」という状態で、東西の経済文化交流はますます頻繁となっていた。敦煌石窟の造営は最盛期に達し、中原からの漢文化、及びインド、西アジア、中央アジアからの文化がさらに敦煌に凝集するようになった。

天寶14年(755)、安史の乱が勃発した。それ以降、唐王朝は繁栄から



衰退へと向かう。吐蕃それに乗じて隴右、河西地帯に攻め込み、建中2年(781)、沙州を占領した。吐蕃王朝は自らの行政、経済制度、生活習慣を推し進め、同時に大いに仏教を盛り立てた。この時期、仏教は速やかに発展し、莫高窟のさらなる造営を促したのである。

会昌2年(842)、吐蕃は大混乱に陥り、国力は衰退した。大中2年(848)、沙州の張議潮がそれに乗じて挙兵した。彼は伊、西、瓜、肅、涼などの十一州を続々と奪還し、直ちに使節を出して唐に帰服する旨の上表を行い、帰義軍節度使に任せられた。それ以来、200年にも及ぶ帰義軍の支配期に入る。帰義軍政権では、張氏による唐制度の回復、漢民族化の遂行などによって敦煌の政局は平穏となり、仏教も張氏帰義軍政権の保護下、引き続いて寺院や石窟の造営が行われた。

▲ 莫高窟

莫高窟は千仏洞と俗称され、敦煌の町から東南へ25キロメートルのところに位置する石窟寺院である。東には大泉河を隔てて三危山が見える。紀元366年から造営が始められたといわれ、南北1.6キロの長さにおたる鳴砂山の断崖に北涼、北魏、西魏、北周、隋、唐、五代、宋、西夏、回鶻、元の各時代にわたって492の洞窟が残されている。総面積45000平方メートルにおよぶ壁画、2200余体の塑像、宋代の木造窟檐五か所が保存されており、世界で最も規模が大きく最も完全に保存された石窟である。1944年、中国政府は莫高窟で専門の保護研究機構——国立敦煌芸術研究所を設立した。解放後、名称を敦煌文物研究所と改め、1984年にはさらに規模を拡大して現在の敦煌研究院になった。莫高窟と所属の榆林窟と西千仏洞は1961年に中国国務院により全国重点文物保护单位に指定され、1987年、ユネスコによって世界文化遺産に認定された。



宋乾化4年(914)、曹議金が張承奉政權を受け継ぎ、瓜沙二州六鎮に再び帰義軍政權を樹立した。彼は中原王朝と密接な関係を持ち続け、中原王朝からの封号を受けてその臣民と称し、唐王朝の権威を利用して西北の各民族の中に自らの地位を確保することを図った。また姻戚関係を結ぶことによって、東に甘州回鶻、西に西州回鶻、于闐政權との友好関係を維持したのである。曹氏政權が中原王朝や周辺の少数民族政權と良好な関係を保ったことで敦煌内の平穩が確保されたばかりでなく、シルクロードの往来が保障されて敦煌と中原及び西域間の仏教文化交流も促進された。すなわち、敦煌仏教芸術の更なる発展のための条件づくりを行ったのである。

宋景祐3年(1036)と南宋宝慶3年(1277)、敦煌は相前後して党項



羌と蒙古族に占領された。しかし、西夏と蒙古の支配者はいずれも仏教を篤く信奉したため、仏教の要地としての敦煌莫高窟が重視された点は変わらず、引き続き洞窟の開鑿が行われた。ただし、海上シルクロードの発展、陸上のシルクロードの衰退、蒙古領域の拡大などによって、敦煌は東西交通における中継地と西域の門戸としての重要な役割を失い、莫高窟も衰退期に入った。

元代以降、莫高窟での造営などは止まってしまい、次第に零落し荒廃した。明嘉靖7年(1528)、嘉峪関が封閉され、敦煌は辺塞の遊牧地となってしまった。

清代康熙57年(1718)、新疆が平定され、雍正元年(1723)、敦煌に沙州所が設けられた。その3年後には沙州衛と改められ、甘肅省の各州から屯田の民を移して沙州城を新たに築いた。乾隆25年(1760)、沙州衛は敦煌県と改められ、敦煌の経済は回復を始めた。莫高窟も世

▲ 榆林窟

榆林窟は万仏峡とも呼ばれ、莫高窟の姉妹窟と見なされている。安西県の西南75キロメートルを流れる榆林河(踏実河とも呼ばれ)の畔に位置しており、河谷が榆樹の林になっていたため榆林窟と名付けられた。兩岸の断崖に唐、五代、宋、西夏、元など各時代の42の洞窟が保存され、東側に31の洞窟、西側に11の洞窟がある。現在、総面積4200平方メートルにおよぶ壁画と259体の塑像が保存されている。壁画や塑像の内容と技法は莫高窟と緊密な繋がりがあり、あるものは共通のテーマを持つが、明らかな違いと独特の風格も合わせ持っている。



の注目を集めるようになった。そして清光緒 26 年(1900)、全世界を驚かせた蔵経洞が発見されたのである。不幸にして、清朝末期の腐敗無能と西方列強の中国侵略という特別な歴史背景のもとで、イギリスのスタイン、フランスのペリオ、日本の橘瑞超、ロシアのオリテンブルグなどの西方の探検家らは、相次いで敦煌を訪れ、不公平な手段で王道士から蔵経洞のおびただしい文物を入手した。蔵経洞の文物は無惨に略奪され、その殆どは離散し、現在では、英、仏、露、日などの国や公私機構に分蔵されるに至った。中国国内に保存されているのはごく僅かでしかなく、これは中国文化史における空前の大災禍であったといわざるを得ないのである。



二、きらびやかな敦煌石窟芸術

敦煌石窟とは、敦煌地域における石窟の総称であり、敦煌市の莫高窟、西千仏洞、安西県の榆林窟、東千仏洞、肅北県の五個廟を包括している。これらの石窟の規模は大小異なっているが、同じ古代敦煌郡の内に在って地域的に近く、内容や様式も相似しており、同じ敦煌石窟芸術の範疇に属するものといえる。故に、これらの石窟をまとめて敦煌石窟と称している。そして敦煌石窟には、莫高窟 735 窟、西千仏洞 22 窟、榆林窟 42 窟、東千仏洞 7 窟、五個廟 6 窟、合わせて 812 の石窟が現存する。

敦煌石窟においては、まず世界文化遺産に登録された敦煌莫高窟が挙げられるべきであろう。それは敦煌市東南 25 キロの鳴沙山の東麓に位置し、前は宕泉が流れ、東は祁連山の支脈といわゆる三危山が横たわっている。紀元 4 世紀から 14 世紀にかけて、ひっきりなしに窟を掘り仏像を造って、南北 1680 メートルに達する石窟群が形成されたのである。現在では、歴代の石窟 735 窟が残り、15~30 メートルの断崖にずらりと並んでいる。石窟に分布は南北二区に分かれて、1~4 層になっている。そのうち南区には、仏像を礼拝する場所として、石窟 492 窟、塑像 2000 体以上、壁画 45000㎡、木造の窟檐 5 座がある。それに対して、北区は僧侶の修行、住居、墓場などの場所であって、243 の洞窟が

▼ 西千仏洞

西千仏洞もまた莫高窟の姉妹窟と見なされる石窟である。敦煌の町から南西へ 33 キロメートル離れた党河北岸の断崖に位置している。莫高窟(千仏洞)の西にあることからこの名が付けられた。北魏、西魏、北周、隋、唐、五代、宋など各時代の 22 の洞窟、53 体の塑像と 910 平方メートルの壁画が保存されている。長期にわたって河水に浸蝕されていたため、崖が崩れて、多くの洞窟は下半部しか残っていない。西千仏洞は敦煌芸術の重要な一部分として、独自の特色も持っている。ここは谷が深く草木が密生して茂り、環境も静かでさながら桃源郷のようである。





▲ 莫高窟北区

莫高窟の北区(断崖の北段)には数百のまた未補強の洞窟があり、そのうち5箇所の洞窟に壁画などの芸術遺品が保存されている。ほかの243の洞窟は、敦煌研究院による発掘調査の結果、僧房窟、禅窟、瘞窟(死者を埋める窟)、礼仏窟、廩窟(倉とする窟)などに分かれることが分かった。また、このとき同時に貴重な文物も多数発掘され、敦煌学の研究に新たな内容を加えることとなった。

ある。現在でも、修行或いは生活用のオンドル、台所、煙突、壁龕(壁に掘られた物置)、燈台などが残っているが、塑像や壁画は現存しない。

敦煌石窟は、石質の脆い礫石断崖に掘られ、細かく彫刻できないので、塑土による塑像と壁画を採用している。塑像に関しては、まず木製の骨組みを作り、その上に葦の草を縛りつけ、さらにスサ入りの泥をつける。つまり、塑像と描画の手法によって人体の筋肉と肌、顔の表情、髪型や服装の質などを表わすのである。他方、壁画では、まず大まかに整えた崖壁に三層ないし三層のスサ入りの泥を塗りつけ、配図、起稿、賦彩、定形などの手順で壁画を描く。敦煌石窟は建築、塑像、壁画を一体化させた総合的な芸術であり、石窟建築の形制は、その内容、機能によって異なっている。塑像は石窟の主体であり、礼拝する主要な偶像となっているので、その多くは石窟仏龕内或いは仏壇の目立つところに置かれ、しかもまわりの壁画に合うように彩色されている。壁画は敦煌石窟芸術に欠かせない部分で、複雑な内容と豊富な場面を表わすことに適している。石窟内は、仏龕内や四壁や窟天井に色鮮やかな壁画がびつりと描かれ、主要な場所に安置される塑像と、互いに映えあいながら完璧な石窟芸術を形成している。

敦煌石窟芸術は、伝統的な漢・晋芸術の上に、外来の芸術的精華を吸収融合したもので、中国の様式を有しつつ、なおかつ民族的或いは民間的な仏教芸術を創造したのである。歴史が悠久で、規模は宏大、内容は奥深く、芸術は精細で美しく、保存状態が良いことによって国内外において名声を博している敦煌石窟芸術は、仏教芸術の至宝であり、中国文化史上において重要な地位を占めているのである。